

東北の片田舎から、若き日のK氏が全寮制の施設に入塾した時の話です。

その施設は、短期で一年、中期で二年、長期で三年の教育がそれぞれ塾生に対して行なわれました。時折、隣接した施設に塾生の知り合いがやってきては、「独り身で食べるものにも不自由しているのだろう」と、土地の名産を土産に提げて来るのです。

ある日、思いがけずお菓子が山ほど集まりました。一度に食べるには、若いK氏たちでも、もてあます量でした。そこで、そのお菓子を食べていく順番を皆で話し合ったのです。その時、最後までとっておこうと決めたのが、銘菓といわれる饅頭でした。決めた順番通りに食べ続け、最後にその饅頭にたどりついた時には、いただいでから二十日以上が経っていました。湿気も多く、風通しも悪い部屋に剥き出しのまま置いていたため、さすがの銘菓も甘酸っぱい臭いを放っていました。

そのような状態にはなつたものの、ある一人の塾生が「この饅頭は、若い我々が腹をすかしているのではないかと、老婦人が重たい荷を抱えてきてくれたものだ。その誠意を我々は心して頂戴するべきだ」と主張しました。さらに「昔から腐つたものほど消化がいいというのではないか」と言い放つたのです。

K氏たちは、彼の言う前半の部分は一理あると思ひ、皆で食べることにしました。饅頭は一人に四個ずつ平等に配られました。各自が部屋に戻って食べると、あるいは捨てる者も出るかもしれないということで、

念ずれば通ず 心の強さが道を拓く



え・牧えみこ

皆で一緒に食べることにしたのです。お茶や水で流し込むようにして、全員が四個の饅頭を完食したのでした。

それから数時間後、激しい下痢に見舞われた者と、不思議と何でもない者が出ました。もしかしたら当たったものでは…と心配して食べた者が、その思いの通りに当たり、重い饅頭をお持ちくださった老婦人に感謝して食べた者は、何ともなかったのです。

K氏は「今思うと当時は無茶なことをやっており、決して人にお聞かせできるような話ではないのですが…」と笑いながら語りますが、ただその時は「無茶なことではあつたけれども、心とは不思議なものだ」と強く思った」といいます。

人の心というのは自分の思つた通りになります。後ろ向きの暗いマイナスのことばかりを強く思えば、思つた通りの環境になつていきます。逆に明るく前向きな考えで、「必ずできる、必ずやれる」と、その実現に疑いを持たず、念じ続けていければ、その思いは実現していくものです。

K氏は若き日に「饅頭騒動」を通して、心の働きの一端を垣間見ることとなりました。その後は、何事に対しても「すべてこれがよい」というプラス思考で生きてきたといひます。

先の読みにくい時代にあつて、会社の厳しい舵取りを強いられるのが現代の経営者です。「念ずれば通ず」を肝に銘じ、強く激しいプラス思考で事にあたつていきましよう。その強さと激しさが、少々のごは吹き飛ばしてしまふはずです。